「タブレット絵本」機械音声より肉声を

子ども、理解度に違い

愛知淑徳大 読み聞かせ実験

タブレット端末の有用性を探る実験に参加した子どもたち＝2日、名古屋市守山区の「もりの風保育園」

幼児教育におけるタブレット端末の有用性を探るため、愛知淑徳大（愛知県長久手市）の坂田陽子教授（発達心理学）のゼミとNTTドコモは2日、名古屋市守山区の「もりの風保育園」で、タブレット上に表示した絵本を子どもに読み聞かせる実験をした。機械音声を聞かせるより、大人が内容を読み聞かせた方が理解度は高くなり、坂田教授は「大人の配慮の下で活用を」と話す。

絵本コンテンツを内蔵するアプリを使い、年少と年長クラスの子ども計55人が協力。イソップ童話の「ライオンとねずみ」を映しながら、横でゼミ生が内容を読み上げる場合と、タブレットから流れる機械音声を聞かせる場合を比較し、理解や記憶の程度、集中力に差が生じるかを調べた。

終了後に内容を尋ねるクイズ9点分を出題すると、年少は肉声で平均2・9点になり、機械音声より0・9点高かった。年長では、点数に有意な差はなかったという。

坂田教授は、タブレット使用には子どもの関心を引く利点があると指摘。その上で「幼い子ほど大人とのやりとりがないと内容を理解しづらい。子どもに与えて放置するのではなく、大人が付き添って使えば効果が得られる」と話している。